

ほととぎす考

井 上 豊

目次

- 一 ホトトギスとカッコウ
- 二 『万葉集』とホトトギス(一)
- 三 『万葉集』とホトトギス(二)
- 四 ホトトギスの表記
- 五 ホトトギスの語源

ホトトギスとカッコウは、鳴き声からすると全く別種の鳥のように思われるが、ツツドリやジュウイチ(三光鳥)などとともに、同じホトトギス科に属し、形態や習性も類似する点が多い。日本には主として初夏のころ渡来する渡り鳥として、古来混同もされてきた。日本の古典でホトトギスの名が見えるのは『万葉集』からであるが、『万葉集』でも(一字一音式の表記のは別として)、ホト

トギスに「霍公鳥」・「霍公」の文字があてられていて、当時から混同されていたようであり、以下委細を吟味し、「ほととぎす」の語源等にも触れて見る。

一 ホトトギスとカッコウ

『世界大百科事典』で見ると、ホトトギスについては、〔杜鵑・時鳥・不如帰〕*Cuculus poliocephalus*……
杜鵑トビ目ホトトギス科の鳥。……同属のカッコウとよく似るが、はるかに小さく……ウスリー・中国大陸・ヒマラヤ・日本、などで繁殖し、冬は台湾・華南・インドなどに渡る。日本へは五月ころ全土に渡来し、八・九月に南方に渡去する。五月から八月にかけて、雄はテッペンカケタカ、またはキヨッキョ、キョッキョキョ、と昼夜をとわず盛んに鳴く。樹上だ

けでなく、飛びながらも鳴く。巢はつくらず、ウグイスの巢に一卵を産むが、このときウグイスの卵を一個くわえ去る。……ひなはふ化後二・三日で巢の中の他の卵やひなを背にのせて、巢の外につき出し、巢を独占し、ウグイスに育てられる。またミンサザイ・センダイムシクイ・クロググミ・アオジなどの巢に産卵することもある。

とある。カッコウについては、同事典に、

Cuculus canorus 初夏にカッコウ・カッコウと鳴くホトトギス科の鳥。ホトトギスに似ているが、それより大きく、……ヨーロッパ・アジアの中北部で繁殖し、日本では北海道・本州・四国で繁殖し、八月下旬から去りはじめ、十月には姿を消す。冬は沖縄・台湾・フィリピン・マライ諸島・パラウ・ニューギニアなどに渡る。五月中旬〜六月上旬に渡来し、平地から低山の森林に多く、枝先にとまって早晩から鳴き出すが、夜は鳴かない。モズ・ヨシキリ・ホオジロ・アオジ・セキレイ・ヒバリ・ビンズイ・クロググミなどの巢に一卵を産む。……ひなは十〜十二日でふ化し、他の卵を巢の外に押し出し、二十〜二十三日くらい仮親に養われて巣立ちする。とあるが、形態・習性とも似ている。ただカッコウはホ

トトギスより形が大きく、鳴き声も異なる。またホトトギスが昼夜の別なく鳴くのに対して、カッコウは夜は鳴かない。カッコウの繁殖地がヨーロッパ全般におよぶ点も異なる。またホトトギスの鳴き声は屈折性を帯び、陰影を感じさせるのに対して、カッコウのは単純で明るい。カッコウは鳴声による名称で、漢語の郭公・霍公も擬声語である。欧語でも、

英 独 仏
cuchoo
 [kuku:]
Kuckuck
 [kukuk]
coucou
 [kuku]

などとなっている。ヨーロッパではカッコウのみ広く分布しているところから、カッコウが代表とされ、ホトトギスは「小さなカッコウ」と訳されたりしている。カッコウは擬音といっても、雄を主としたもので、雌はゴアゴア・グググとかピピー（ピッピッピー）と鳴くという。ホトトギスも雌はピピー（ピッピッピー）などと鳴くというが、どちらも名称は雄の鳴声から来ているのである。日本文学では、カッコウよりもホトトギスが題材としてはやさされているが、ヨーロッパではカッコウが主で、ワーズワースなどもカッコウの特色を生かし

た名詩を残している。

ホトトギスについては、川口孫治郎著『杜鵑研究』
(大正五年刊)があり、序文に、

現在までの科学者の忠実なる研究報告では、ホトトギスは東洋地方の特産で、欧米地方にはクワッコウ類がいるのみらしい。従ってホトトギスの研究記録は欧米には全く無くて、東洋特に支那と日本とに在るのみらしい。さうして支那のは古いけれども、極めて少い。日本のは、古くは文学上のが多く、近頃になって実験的なのが多少現はれて来た位で、決して沢山とは云はれない。

と見えるので、大正初期のころには、欧米にはカッコウが分布し、ホトトギスは東洋特に中国や日本の特産のよう^にに考えられていたことがわかる。川口氏はホトトギスを主として考察し、中国のもホトトギスのみを問題としているが、『郭公の藩殖に関する研究』(仁部富之助著、大正五年二月刊)^(注1)は、「杜鵑属 *Cuculus* 鳥類」として、ホトトギスやカッコウを概括し、カッコウを主として考察している。秋田県仙北部花館村方面を中心として観察した記録で、ホトトギスとカッコウの習性の比較について参考になる。川口氏によると、北海道では、カッコウを見

聞ることが珍しくないけれども、ホトトギスの鳴声を聞くことは稀だと言う。隠岐島や八丈島・小笠原島等にもホトトギスの形跡はあるらしいが、北海道がカッコウを主とするのは、青森県・秋田県と同じ。これらの地方ではより古くからカッコウの渡来地になっていたのではないかと思う。

南方熊楠氏は、『郷土研究』(大正五年七月刊第四巻第四号所載「時鳥の伝説」。全集第二巻抄録)において、ホトトギスとカッコウの異同や分布について説いたのち、

本草啓蒙に支那の鵲鳩一名郭公をカッコウドリに宛て、此鳥四月時分にカッコウと鳴声甚だ高く清スんで居る。山谷に震響す、即ち郭公と自呼ぶなりと云るは中あたて居る。本草網自には鵲鳩てふ異名をも出す。是も獨逸名クッククク和蘭名ケツケツク同様其鳴声に基いた名だ。兎に角時鳥もククルス属の昔ながら、英語でクックー拉丁語でククルス希臘語でコッコクスは、吾邦にも在るカッコウドリに正当す。など言及している。欧州のも中国のもカッコウとするが、杜鵑・子規はホトトギスを指すと見ている。

『世界大百科事典』の説明で見ると、ホトトギスはウ
スリー・中国大陸・ヒマラヤおよび日本に、カッコウは
ヨーロッパとアジアの中北部に繁殖する。(『日本百科大事
典』には、ホトトギスはシベリア南東部や中国北部に繁殖する
とある。) 通行の『鳥類図鑑』は簡単に、ホトトギスはア
ジア東部、カッコウは欧亜大陸・北アフリカに分布する
としているが、とにかくカッコウはヨーロッパとアジア
に広く分布し、ホトトギスは東アジア特に中国や日本を
主とする。中国や日本にはカッコウ・ホトトギスともに
繁殖するのであるが、古くはカッコウとホトトギスが混
同されたりしているので、以下日本文学を中心に考察し
たい。

二 『万葉集』とホトトギス(一)

ホトトギスは古来日本文学の題材としてもはやさ
れ、特に和歌や俳諧では伝統的に尊ばれて来ている。平
安朝には、かなり伝統化し、『古今集』や『枕草子』で
もタチバナと結びつけられていて、農耕生活との関係も
注意される。『古今集』に、

いくばくの田を作ればかほととぎすしでの田をさを
朝な朝なよぶ

『枕草子』に、

賀茂へまいる道に、田植うとて、女のあたらしきを
しきのやうなるものを笠にきて、いとおほう立ちて
歌をうたふ。……をかしと見ゆるほどに、ほととぎ
すをいとなめうたふ、聞くにぞ心うき。「ほとと
ぎす、おれ、かやつよ、おれ、鳴きてこそ、われは
田植うれ」、とうたふを聞くも、いかなる人か、「い
たくな鳴きぞ」とはいひけん。

など見える例から、当時はホトトギスと農耕生活とを結
びつける傾向が伝統化していたことがわかる。ホトトギ
スを「しでのたをさ」と呼んだりする例も当時から見ら
れ、後世諸説が生まれているが、ホトトギスについて
は、『万葉集』にさかのぼって考える必要がある。

ホトトギスを詠んだ古歌としては、『万葉集』に、藤
原夫人の

霍公鳥ほくこういたくな鳴きそな汝が声をさつきの玉にあへ貫
くまでに(巻八、一四六五)

という歌がある。「さつき(五月)の玉」は薬玉くすたまを指すと
する説もあるが、他の用例で見ると、タチバナの実を緒
に通して輪として、かずらなどにしたの言ったらしく、
ホトトギスがタチバナと結びつけてよまれているの
が注意される。夏雑歌の冒頭の歌で、以下志貴皇子・弓

削皇子から大伴家持までのホトトギスを詠みこんだ歌十首ばかりがまとめて載せてある。志貴皇子はホトトギスの来て鳴くのを待ちこがれる意を詠んでいるのであるが、弓削皇子は、

ほととぎす無かる国にも行きてしかその鳴く声を聞
けば苦しも

というように、ホトトギスの鳴くのをうとましく思うような歌になっている。これは単にうるさく思うのではなく、恋ごころと結びつけた作であろう。萩やタチバナの花・卵の花などと結びつけてよみこんだ歌もあるが、相聞の性質を帯びたのも目につく。

卷二には、持統天皇が吉野離宮に行幸なされた時、弓削皇子が額田王に、

いにしへに恋ふる鳥かもゆづるはの御井より鳴きわ
たりゆく

という歌を贈られ、額田王が答えた
いにしへに恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし
わがもへるごと

という作があるが、懐古や相聞の情と結びついた歌になっている。藤原夫人の歌よりは遅れるのであるが、藤原夫人は天武天皇の夫人、弓削皇子は天武天皇の第六皇子であり、額田王は天武天皇の大海人皇子時代から特殊

な関係があり、三首はほぼ同時代の作と言える。藤原夫人の歌はタチバナを詠みこんでいるが、花ではなく、実を題材としたので、後世のように趣味化してはいない。弓削皇子の次の広瀬王は、天武天皇の時、川島皇子とともに国史の編纂の命をうけており、養老六年一月に世を去った人物であるが、歌は

ほととぎす声聞く小野の秋風に萩咲きぬれや声の乏
しき

となっていて、いくらか趣味化している。卷十には、「古歌集中出」として載せた長歌（一九三七）がある。神名備山を「ふるさと」と呼んでいて、相前に古い歌と見えるが、ホトトギスの妻恋をうたっている。

ホトトギスを詠んだ歌は、卷八・卷十・卷十五・および卷十七以下に多く見えるが、奈良朝になってからの作が大部分であり、ホトトギスを趣味化し、藤・萩・卵の花・タチバナ・アヤメグサなどと結びつけて詠んだ歌が多い。卷九には、伝説歌人として知られた高橋虫麻呂のホトトギスを詠んだ長歌（一七七五）があるが、卵の花やホトトギスがウグイスの巢に卵を生みつけて、雛を育てさせるという風習をも詠みこんで複雑になっている。ホトトギスのこうした奇習が当時から注意されてい

るのが面白い。(杜甫の杜鵑の詩も同じ習性を詠みこんでいる。)同じ歌の中で、ホトトギスの妻恋をもうたい、ホトトギスに「あはれ(何怜)その鳥」と呼びかけ、ホトトギスに対する親愛の情をも示していて、複雑になっている。

うぐひすの 生卵かひこの中に ほととぎす ひとり生まれて なが父に 似てはなかず なが母に 似てはなかず 卵の花の さきたる野べゆ 飛びかけり 来なきとよもし たちばなの 花を居ちらし ひねもすに なけど聞きよし 幣まひはせむ 遠くな行きそわがやどの 花たちばなに 住みわたれ鳥

反歌

かき霧らし雨のふる夜をほととぎすなきてゆくなり
あはれその鳥
これらの要素をからみ合せた歌も種々見られる。卷十八の長歌(四〇八九)には、「卵の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめぐさ 珠ぬくまでに 昼暮らし 夜わたし聞けど 聞くごとに 心うごきて うちなげき あはれの鳥と いはぬ時なし」とあり、反歌にも

卵の花のともにしなげばほととぎすいやめづらしも
名のり鳴くなへ

ほととぎすいとねたけくはたちだなの花ちる時に来
なきとよむる

など詠んでいる。四一六六番の長歌には、「卵たまご月したてば 夜ごもりに なくほととぎす むかしより 語りつぎつる うぐひすの 現うつし真子まこかも あやめぐさ 花たちばなを をとめらが 珠たま貫くまでに」などともある。

三 『万葉集』とホトトギス(二)

卷八や卷十に見えるホトトギス関係の歌には、趣味化の傾向が目立つが、古い歌に見られた懐旧や相聞関係の歌も相当にあり、ホトトギスそのものを思慕する歌も生まれている。趣味化の傾向が固定し、ホトトギス自体に対する思慕の歌が生まれているのが新傾向として注意されるのである。卷十五には中臣宅守のホトトギスを詠んだ歌が数首見えるが、すべて相聞歌である。時代の新しい歌では、大伴家関係の作が多く、特に家持の歌が中心になっている。家持の歌には、相聞歌や趣味的な作が多く、古歌に見られたような懐旧の情や「さつきの玉」の風習、ウグイスとの関係などをもよみこんで複雑である。特にホトトギスとの関係をよせた跡が見え、ホトトギスを恋うる歌が目立つ。天平二十年の三月二十三日橘諸兄の使者として、田辺福磨が越中守として在任中の家持

を訪れ、饗宴が開かれた時、福磨の詠んだ歌の中に、
ほととぎすいとふ時なしあやめ草かつらにせむ日此
ゆなきわたれ(四〇三五)

とあり、二十四日に布勢の水海に遊んで、同じく福磨
が、

藤波の咲きゆく見ればほととぎす鳴くべき時に近づ
きにけり

など詠んでいる。右の歌に対して、家持が、

あすの日の布勢の浦まの藤波にけだし来鳴かず散ら
してむかも

と和しているが、初句は「ほととぎす」ともあつたらし
い。二十五・二十六日月の歌にも、

めづらしき君が来まさば鳴けと言ひし山ほととぎす
何か来鳴かぬ 久米広繩

多胡の崎木の暗茂ふくれゆにほととぎす来鳴きとよめばはだ
恋ひめやも 大伴家持

ほととぎす今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも験
あらめやも 田辺福磨

木の暗くれになりぬるものをほととぎすなにか来鳴かぬ
君に逢へる時 久米広繩

ほととぎす此よ鳴きわたれともし火を月夜になそへ
その影も見む 大伴家持

などの作が見え、ホトトギスが如何に関心の的になつて
いたかが知られる。福磨は聞きなれてはいたであらう
が、特殊な情況で聞くのを楽しみにしていたものと思わ
れる。けれども四月一日(陽曆五月六日)、広繩の居館に
おける宴席の歌にも、

卯の花の咲く月たちぬほととぎす来なきとよめよ
ふたふた含みたりとも 大伴家持

二上の山にこもれるほととぎす今もなかねか君に聞
かせむ 遊行女婦土師

居り明しも今宵は飲まむほととぎす明けむあしたは
鳴きわたらむそ 大伴家持

あすよりはつぎで聞こえむほととぎす一夜の故かちに恋
ひわたるかも 能登乙美

とあって、まだホトトギスの声を聞き得ないでいたら
し。遊行女婦土師は、四〇四七番の歌の作者にもなつて
いて、福磨を接待するために、一行に随行していた女性
と見える。福磨は遂に北国のホトトギスの声を聞き得ず
にしまったかと思われるが、とにかく家持を中心とした
歌人群のホトトギスに対する熱意が思いやられよう。

四 ホトトギスの表記

『万葉集』においては、ホトトギスは一字一音式表記

子死ス、其ノ魂鳥ト成リテ春夏ニ鳴ク、コレヲ思婦鳥ト号ス、其ノ故ハ、古郷ヲコヒテ不如婦不如婦ト鳴ク間、不如婦鳥トモ云フ、又、子規又蜀魂・蜀魄トモ云フ、皆郭公ノ古事也、文選ニハ鳥ハ杜宇ガ魄ヨリ出ツツイヘリ、此ノ鳥オノガ古郷ニ不婦シテ他郷ニテ死セシコトヲ悲シンデ、万ノ行人旅客ヲモ不如婦々々トス、メテ、ハヤク古郷ニカヘレト教フル也。

とあり、誤伝もあるが、これらを照合すれば、杜鵑・子規・時鳥・不如婦・不婦鳥などの名号の由来が一応理解されよう。『連集良材』よりは古いと思われるが、同じく中世の書『雑話集』には、内外の故事を織りませて、ホトトギスの異名につき詳説している。

一に郭公、二に時鳥、三に苦婦楽鳥、四に三月すこ鳥、五に土田田長、六にむら鳥、七にうないこ、八にくって鳥、九に無常鳥、十に過時不熟鳥、十一にいもせ鳥、十二にこひし鳥、十三にあみ鳥。とし、郭公について、

第一に郭公といふは、郭の国の王にてあるが、他国とたたかひける時、敵にせめられて此の国に来て、寒にせめられて死して後鳥となれり、文選云、郭公去三南寿二再不婦、燕亡婦垂三紅涙二といへり。

とあるのをはじめ、妄説が多いが、異名の由来を考える上に参考になる点もある。

江戸時代になると、カッコウとホトトギスの異同が問題にされている。白石の『東雅』にも、『和名抄』の説を疑い、「鷓鴣・郭公もこれ一物にもあらず、二鳥またホトトギスといふ者とも見えず」とし、中国の古書に見える杜鵑については、ホトトギスとの共通性に注意しているが、郭公については、「郭公は即ち爾雅に見えし鳩鳩なり、全く是れ別物なり」として、郭公と杜鵑の別を強調する。徂徠も、「ほととぎすを郭公といふ事は、郭亡といふ事のあるゆえに、望帝の故事にまぎれたるなりべし、真の郭公は暮春の頃よりかっこうとなく鳥有るなり」とはっきり二者の区別を説いている。

『和漢三才図会』は、杜鵑をホトトギスとして、古来の説を要約しているが、『万葉集』や『和名抄』等に郭公・霍公鳥・時鳥などの文字を用いているのは誤りとする。『箋注倭名類聚抄』（巻七鷓鴣鳥の条）も、和漢の諸書を引き、杜鵑・子規をホトトギスとし、『和名抄』に「鷓鴣鳥」・「郭公」をホトトギスと訓んでいるのは誤りとしている。

白石も杜鵑とホトトギスの共通性に注意しているが、李時珍の『本草綱目』には、

蜀人見^レ鵲而思^ニ杜宇、故呼^ニ杜鵑、說者遂謂、杜宇化^レ鵲訛也、鵲・子鵲・子規・鷓鴣・催婦、諸名皆因^ニ其声似[、]各隨^ニ方音^一呼^レ之而已、其鳴若^レ曰^ニ不如^一婦去[、]諺云陽雀叫・鷓鴣是矣、禽經云、江左曰^ニ子規^一、蜀右曰^ニ杜宇^一、甌越曰^ニ鴛鳥^一、云々。

とあり、鵲・鷓・規等みな「方音」の相違に因由するとしている。いずれにしても鳴声が基礎になっているらしく、擬音とすると（西歐も同じ）、ホトトギスよりはカッコウに近い。杜鵑も実体はカッコウらしく、中国ではカッコウを主として、ホトトギスが包括あるいは混同されていたのではなからうか。江戸時代に二者の異同が時に問題になり、『和漢三才図会』や『箋注倭名類聚抄』のように、杜鵑・子規をホトトギスとする説が有力になったと見える。『大漢和辞典』に、郭公は「鳩」の類で「ふぶどり」(布敷鳥)とし、ホトトギスには、鳩カフ、鷓フ、鷓キなどの字を挙げて区別しているが、説明を見ると、カッコウとホトトギスを混同しているようである。『世界百科事典』の説明でも、中国大陸やヒマラヤ方面もホトトギスの繁殖地として挙げられている。

こうして大陸では東西ともにカッコウが古来一般化して、カッコウがホトトギスを包括し、日本ではホトトギスを主としてカッコウを包括するような関係にあったか

と考えられる。カッコウはカッコウとして、ホトトギスはホトトギスとして、それぞれ区別もされながら、一般の傾向としては右のような関係にあったらしい。

川口氏の『杜鵑研究』も、「我民俗の間に久しくホトトギスと其同類のクワッコウとを混雑している風があったが、云々」と注意しているが、これは古代を主として言ったので、後世の資料についてはホトトギスのみを問題としている。

五 「ほととぎす」の語源

ホトトギスの名義については鈴木木根の『雅語音声考』に、

郭公のホト、キ今ノ俗、ホゾンカケタカ、又テツベンカケタカ、ナド云フヲバ、古人ハホツトツ・ホト、キト歟、ホツトツトキト、歟キケル也、万葉集ニ、安可登言爾名能里(奈心 奈流保登等云須、アカトキニナリ)ナクナルホト、キス) 千載集ニ關路時鳥云ラ題ニテ中納言時卿、逢坂ノ山ホトトギス名乗ル也、関守ル神ヤ空ニ問フラン、(注5)

とあるように、擬音からきた名称と思われる。『万葉集』のころ普及しているのを見ると、起源はよほど古いのであるうが、記紀や『風土記』などの古書に見えない点から考えると、さほど古いとは思われない。

『十王経』(注6)に、

樹有^ニ荊蕨^一宛如^ニ鋒刃^一、二鳥栖掌、一名^ニ無常鳥^一、二名^ニ拔目鳥^一、我汝旧里化成^ニ鸚鵡^一、示^ニ怪語^一鳴^ニ別都^一

頓トトギス宜ス寿ス、此鳥近異語云我汝旧里化成ニ鳥鳥、示レ怪語

鳴トトギス阿和薩加、此鳥遠異語
折家命鳴
病來將命尽

とあるのを『広文庫』に引いているが、『十王経』は大藏経の中にもなく、唐代の偽経とされている。けれども相当に古い文献らしく、『和名抄』の説と関連がありそうである。白石も『和名抄』を引いたのち、「ホトトギスとは、鷓鴣の啼声なり、十王経に見えたり、倭名抄に見えし所の如きは、我国の中世より云ひつきし所によりしなるべし、されど鷓鴣・郭公ともこれ一物にもあらず、二鳥またホトトギスといふものと見えず、云々」と説いている。『和名抄』については、郭公をばカッコウを指した語のように解しているようである。郭公・杜鵑・鷓鴣の実体は別として、中国古代の詩文にこれらが特にもてはやされた跡はなく、ホトトギスが『万葉集』でもてはやされたのは、元来中国の詩文の影響によるとする説には従えない。ホトトギスは固有の和語であり、和歌の発達と結びついて歌界でもてはやされるようになったものと思われる。〔ほととぎす〕を梵語とする説が(注7)伊藤東涯の『乗燭譚』にも見えるが、確かな根拠はなさそうである。藤原朝のころの用例では、懐旧や相聞、また薬玉の風習などと結びつけてよまれているが、以後次第に趣味化の傾向が目立ち、卯の花・タチバナ・アヤメ等花や草木とも

にもてはやされ、常套化の傾向も見える。

かようにホトトギスが和歌の題材として発達したのは、五音で和歌によみやすいのが大きな原因になっているように思う。(ウグイスも助詞一字を添えると簡単に五音になる。)卯の花やタチバナなどと特殊な関係があるようにうたわれているが、ウツギやタチバナの花咲く時期に特に姿を見せて鳴くところからきたのみで、特殊な事由によるとは思えない。偶然的な事情を、詩的空想によって美化しているようである。奈良朝の盛時に大伴家(特に家持)を中心に、ホトトギスの歌が多いのが注意される。中国の古書に見える伝説も発達を助ける力になったであろうが、主因とは考えられない。東歌とホトトギスの関係やカッコウと「よぶこどり」の異同等々をも問題にしたいのであるが、紙幅の関係から続稿に譲る。

(未完)

注1 内田清之助著『日本鳥類図鑑』(大正三年刊)には、

「杜鵑目・杜鵑科(ホトトギス・カッコウ・オウム・インコウの類を含む)」とあり、黒田長礼氏の同じころの著作にも、杜鵑を広義に用いて、カッコウを含むとしていて、当時はそういう見解が通説になっていたと見える。杜鵑の語義については後に触れる。

2 昭和九年三省堂刊「新修百科辞典」などには、杜鵑科

とあるが、最近は「ホトトギス目」・「ホトトギス科」とした著作もあり、講談社の『日本鳥類大図鑑』では、「杜鵑目・杜鵑科・杜鵑属」とし、折衷的になっているが、杜鵑の本来の語義から考えると混乱が見える。

3 『日本鳥類図鑑』（東海大学出版部刊）には、カッコウは、ユーラシア大陸の大部分、（極北地・アラビア半島・インド・インドシナ半島を除く）、サハリン・日本・イギリス・アフリカ北部・南アフリカに蕃殖するとし、ホトトギスの分布については、ヒマラヤ・チベット・中国北部から東北地区・朝鮮半島・ウスリー地方・日本・スリランカ・大スンダ島などで蕃殖し、北の地方のものは冬に南へ渡る、日本へは夏鳥として渡来し、九州以北で蕃殖する記録のある地域は、北海道・本州・佐渡・四国・九州・対馬・屋久島・伊豆諸島・小笠原諸島・硫黄列島・中部琉球・南部琉球である、とあって、カッコウ・ホトトギスともに分布領域が大分広がっている。講談社の『日本鳥類大図鑑』には、ホトトギスの国外の分布について、北はウスリー（ウラジオストク）・満州南東・朝鮮、南は中国中部・南部山脈まで蕃殖し、冬季は済州島・台湾・中国南部・アンダマン諸島・セイロン島・インド南部などに渡来する、満州では安東省、中国では江蘇省・浙江省・広東省・広世省・済南島に分布する、とある。カッコウやホトトギスの分布については、『野鳥の歳時記』（小学館刊）3付載「探鳥地一覽」

なども参考になる。

4 霍は字書によると、霍の俗字で、音はクワク。『大漢和辞典』には、「あはただしくとぶこゑ」とし、第二義として、「すみやか」「にはか」の音を挙げている。『大字典』には、「雨中に鳥が雙び飛ぶ時の声」とある。『霍公』という漢語の用例は見えない。『万葉集』に専ら「霍」を用いているのは、擬声のほかに、すみやかに飛ぶ意をも利かせ、謎書きの性質を帯びるのかも知れない。郭公は、中国では古く杜鵑に似た伝説と結びつけられ、『文選』にもよみこまれた人名として例があるが、日本では平安朝以後見えるのみである。

5 中村成文氏は、『郷土研究』第四卷第三号（大正五年）に、「時鳥に就ての伝説」を発表し、ホトトギスの鳴声は、「地方によって色々の聴きやうがあり、之に附会した昔話も多いやうである」と説き、武蔵多摩郡方面ではヲトノドッキッチョ・ヲトハラツッキッチョなど鳴くと言っているが、それをホトトギスの弟殺しの伝説と結びつけて説いている。伝説には山芋を中心とした争いがからんでいるのであるが、後で柳田国男氏が付記して、鳴声は別として、弟殺しや食物の争いから肉親を殺した話は他にも広く分布領域があるとして、能登方面からの舟人から聞いたという話や岩手、三陸方面その他の伝えに、兄弟殺しや薯（いも）の話とホトトギスの結びついた伝説を紹介している。南方熊楠氏も同誌第四号所載

「時鳥の伝説」で、ホトトギスやカッコウについて内外の諸地における類似の伝説に言及している。伝説のことは、ホトトギス観の参考のために書き添えたのであるが、日本のホトトギス観にも、中国の杜鵑伝説にも類似の暗さがある。

『郷土研究』第四巻第四号には、南方熊楠氏の「時鳥の伝説」に続いて、川口孫治郎以下の諸氏のホトトギスに関する報告が載っているが、これらの中でホトトギスの鳴声を紹介されている。まとめて見ると、武蔵の、ヲトノドツッキツチョ、ヲトハラツツッキツチョ、のほか、紀伊のホツチョントケタカ、ホツトントケタカ、ホツポウカケタカ、土佐の、カッチャトケタカ、ホンソノカケタカ、などともある。川口氏の『杜鵑研究』によると、ホンゾノカケタカ、テッペンカケタカが普遍的で、ホンゾンはホツトン、ハツタン、ホゾン、ホツチョ、ホツチョン、ホツト、などさまざまに転訛している。これらは雄の鳴声を主としたのであるが、雌の鳴声はグググと聞こえるということである。これは前にも触れたことであるが、雌の鳴声を主とすれば、カッコウの鳴声に近いことになり、カッコウとホトトギスが混同された事情も理解しやすい。

『大言海』によると、「す」は鳥を意味する語尾であり、「うぐへひす」「ききす」「からす」など同じ、「ほととぎ

す」の「す」を除くと、以上の諸例から、鳴声をもとにして、名称の生まれた過程を考えることができる。

6 『十王経』には二種あって、一は日本のみに行われて、『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』と言う。内容も異なり、日本には注書も古く出来ている。引用の『十王経』は、おそらく日本のみの『十王経』であろう。『下学集』に引く『十王経』には、「ホトトギス」を「ヘットトンキス」としている。

7 白石の『東雅』に、梵語によって国語の語源を説いて、「ホトトギスは部都頓宜寿也」としているのは、『和名抄』所引の『十王経』によったものらしく、ホトトギスの語源を梵語とする説は、『東雅』あたりをさすのかと思われるが、『十王経』には問題があり、白石がホトトギスを梵語と結びつけているのは誤解であって、ホトトギスの語源らしいものは梵語には見えないという。

付記 注5について補足すると、『総合日本俗語彙』（民俗学研究所編、平凡社刊）には、ホトトギスの条に、新潟県南蒲原郡の説話として、『加無波良夜譚』所載の類話を引き、カッポウドリの条には、『静岡県伝説昔話集』に拠って類説を載せている。そして類話はほとんど全国に行きわたっているが、なき声の解釈は地方によって異なるとする。